

※双方記憶あり転生。妊娠。未来捏造。

何が起こった。

傑の黄色い瞳が珍しく見開いている。

状況がいまいち呑み込めず、ばちくり動く眼には、同じような表情をした俺が映っていた。

うん、待って、俺も判^{わか}らない。

状況を整理しよう。ここは寝室。それぞれの養親を説得してふたり暮らしをはじめてから、5年近く一緒に過ごすふたりの部屋だ。

俺はベッドに座っていて。傑は床に大の字で寝ている。いや倒れているのか。なんで。確か直前にズドンと大きな音が響いた。

いつものようにふたりでベッドに包^{くる}まって。傑が髪を撫^きでてくれたあと、そうだ、耳元で『いいかな？』って訊いてきたんだ。俺は嬉しくて、何度も頷いて、傑がクスクス笑って、一緒に笑ったんだ。

それから、傑の首に腕を回した。何度もキスした。舌^{はて}を絡めて、唾液を分け合って、呑み込んで。身体の芯が火照った。頭の腰を引き寄せた掌が肌着に潜って。頭がふわふわした。傑の唇が首元に、あ。

ぞくっと背中が震える。全身の血の気が引いていく。

そうだ、僕、首元を吸われた瞬間。

視界に広がった黒髪。起き上がって目の前の肩を力いっぱい押しのけた。

指先が小刻みに揺れる。左手の薬指の根元に、ギチッと締まるような痛みを感じて視線を向けた。控えめな銀色の光を放つ指輪が、責めているようだった。

当たり前だ、だって僕。

不意に左腕を引かれ体勢を崩す。そのまま逞しい胸元に抱き留められ、腕に包まれる。視界が揺れる、なんで、僕。

暖かい。温かい。あたたかくて、目を開けていられなかった。引き^っ攣る喉から漏れる声。嘘だ、嫌だ、なんでだよ。大きな掌がしきりに頭と背中を撫でてくれる。

「おい…てかな…で……き、らい…に、ならないで…っ、」

「ありえないよ。愛してる」

そうだよ、ありえない。愛してる、僕のためならもういちど死んだって構わない。なのに。

僕、俺、僕のこと引き剥がしちゃった。

きっと怖かったんだね、いまの悟は女の子だもん。ごめんね、大丈夫だよ。

こわいなんてあるもんか。僕が怖いのは僕と離れることだけだよ。

油断してたなあ、呪霊だったら危なかったね。でも怪我は無いから大丈夫だよ。

おまえが簡単にやられるかよ。とっさに受け身取ってたぞ。それに、身体は平気でも心は傷付いただろ。

ねえ悟、昔もしかしてそういう乱暴されてない？隠さないで言いな。

無下限呪術ナメんな。ニュートラルな状態で効かないのはお前だけだ。順転も反転もあるんだからな。そう、僕だけ。僕だけは僕に無条件で触れる。お前なら僕に何したって構わない。なのに。

心配しないで。もう何があっても君を手離さない。男の甲斐性の魅せ処かな。

何だよそれ。僕も昔は男だったんだけど。お願い、離さないで。

僕にずっと頭や背中や左手を撫でてもらって、その日はいつもと同じように、ただ身を寄せ合って眠るだけだった。

「それから1年も掛からなかったかな？自然と平気になつてさ。だから結局、原因は判らずじまいだね。今ではご覧の通りだよ」

ベッドに椅子を寄せて座る悠仁に向かって話しかける。

掛け布団の上から、大きく膨らんだお腹に手を乗せ優しく撫でる。愛しい児。大好きな人の血を引く子供。ここに、僕と僕の新しい家族がいる。

悠仁はニコニコした顔で僕のお腹を見つめたあと、何かを考えるように唸りながら天井を見つめた。どうしたのかな。

しばらく経ってこちらに視線を戻した。考えがまとまったようだ。

「夏油先生の言う通りかも」

「どういうこと？」

「んー、伏黒や釘崎みたいにうまく言えないけど。五条先生、男だったじゃん？だからさ、なんていうか、気持ち？がさ、`傷付けられてもいい`とは思ってても、`女の人として愛されたい`とは思ってなかったんじゃないかなって」

悠仁の言葉は天啓だった。

確かに僕はあの頃、いや今もだけど、僕になら置いていかれる以外なら何をされたっていい。されてもいい、であって、してほしい、わけではなかった。

僕が抱きたいのなら手を出してくれていい、僕で愉しませられるといいな、くらいの気持ちだった。

身を寄せ合うのは心地良かった。温もりが嬉しかった。求められて舞い上がった。でもそれはかつて失った存在に縋っていただけ。当時もう籍を入れていた。夏油傑という男にずっと傍に居てほしかった。けど、夏油傑という男を女として繋ぎ止めたいとまでは、その頃には考えていなかったのだ。たった今そのことに気が付いた。

今は違う。道具のように扱ってくれても構わないのは変わらない。でも今はそれだけじゃない。

あの声も、眼差しも、掌も、腕も、熱も、吐息も、汗も、精も、涙も。何もかもが全部俺のもの。

俺だけに与えられて、俺だけが受け取れるもの。他の誰にも欠片だって分けてやらない。僕の子供を産める女は未来永劫僕ひとりだけだ。

長年の疑問が解消されて思考と感情がクリアになった。

「うん、理解できた。ありがとう悠仁」

「ゝお腹の子のキョーイクに悪いゝって、夏油先生や乙骨先輩に怒られそう」

ふたりでひとしきり笑って、口許に指を立てて、しー、のポーズを取り合う。

「それにしても、夏油先生やさしいね」

僕もそう思う。男の顔に泥塗ったようなもののなにさ。

「僕の自慢の旦那サマだよ」

見せつけるように指輪にキスをした。

六眼という体質のためか、硝子いわくかなり強めの悪祖に見舞われている僕を気遣って、今日は悠仁が傍に控えてくれていた。掛け布団を直しながら、寝れる時は寝ておくよう促される。お言葉に甘えて少しだけ眠ることにした。

目が覚めたら、僕が帰ってきていますように。

指輪とお腹にもういちど唇と掌で触れてから、ゆっくり瞼を閉じた。

「うん、理解できた。ありがとう悠仁」

「ゝお腹の子のキョーイクに悪い、って、夏油先生や乙骨先輩に怒られそう」

ふたりでひとしきり笑って、口許に指を立てて、しー、のポーズを取り合う。

「それにしても、夏油先生やさしいね」

僕もそう思う。男の顔に泥塗ったようなもののなにさ。

「僕の自慢の旦那サマだよ」

見せつけるように指輪にキスをした。

六眼という体質のためか、硝子いわくかなり強めの悪祖に見舞われている僕を気遣って、今日は悠仁が傍に控えてくれていた。掛け布団を直しながら、寝れる時は寝ておくよう促される。お言葉に甘えて少しだけ眠ることにした。

目が覚めたら、僕が帰ってきていますように。

指輪とお腹にもういちど唇と掌で触れてから、ゆっくり瞼を閉じた。